

中学時代、十四・五歳の頃、画家は何時如何なる時も懐に画帖を持って
いなければいけないとの言葉を見た。その言葉は川崎小虎先生の書いた
文章であった。美術学校に入って先生にはじめてお目にかかった。その事は
現在に至る迄画帖をはなさない生活になった。うっかり画帖を持たずに
外出することはめったにないことだが、画帖を持たない自分に気づいて
あわてて文房具店に行き、小さな画帖と鉛筆をもとめてほっとする。
それはほど写生や素描をするわけではないけれど、習性の中にある。手を
動かし体で見るといふ私なりの道を今後歩くのだろう。

(作品とその素描 山種美術館) 昭和五十九年 高山辰雄

ものを見ることは目だけだろうか。朝夕、四季、それぞれに私の体中に
あるもの総てが、目も手も足も別々のものではなく、一体となってものを
見ている感じの強い時がある。たとえば海の中に体をつけて見る雲
はだして土を踏んでいる時の森、何か別のものを新しく感じることもある。
目で見ているが皮膚を通して見ているようにも感じる。まして心のあり方は
大きく働いているように感じられる。何も思わずそこにあるようにものを
写して見たいし、しかも即物的でなく、私の中の生命と直結したものが写生帖の
上に出るこないかなと願う日がある。

(高山先生がここに云う) 即物的な見方とは、その物に対する認識であるとか
心持ちと云う。先生がこれまでに身に付けと来た知識を通じた見方を指して
いる様に思う。即ち真っ更な心でものと接することの大切さを説いているの
だろう。まだまだ交易にものを見ていることであると耻かしくなってくる。

私達は日本と云う美しい国で生活し暮らしの中で培った情緒の力がものを
見る時の方向付けの一端を担っていると思っております。それぞれの立場により
様々に感じられ、そのどれもがある意味正しく、適切でもあります。

文中、高山先生は、何も思わずそこにあるようにものを写して見たいと仰しゃ
っております。果して私の様な凡夫に出来る事なのでしようか。それよりも
私はこの情緒を育む豊かな感受性こそ、とても重要であると考えます。

複数あるものの中より、どれかを選び出すといった時の心のはたらきなどが
そうです。これは、絵をかく際には一本の線を選び出す目であり、状況にあった
或る一色を選び出す目であると思っております。このちからこそ、美的感覚で
あり、美しきものを好み、不正を嫌う心の源でもあります。ですからこのことは
日々我が身に起こる様々な問題を自らが今ある状態に最も適合したひとつ
を選択しながら生きています。私達の生き様そのものでもあると思っております。

絵に戻して考えるなら、何をかくかのモニターを選びから、何を使ってかくかの画材を選び
その大きさや線、色に至るまでの全てであり、これは日々の暮らしと同様であり
絵も暮らしも一入りの生き様といえるのではないのでしょうか。下手な生き方でも
丁寧な生き方もある人が素敵にように、丁寧を描いていこうと思っております。